2012年（平成24年）7月1日発行（毎月1回1日発行）第30巻第7号（通巻346号） ISSN 1881-5235

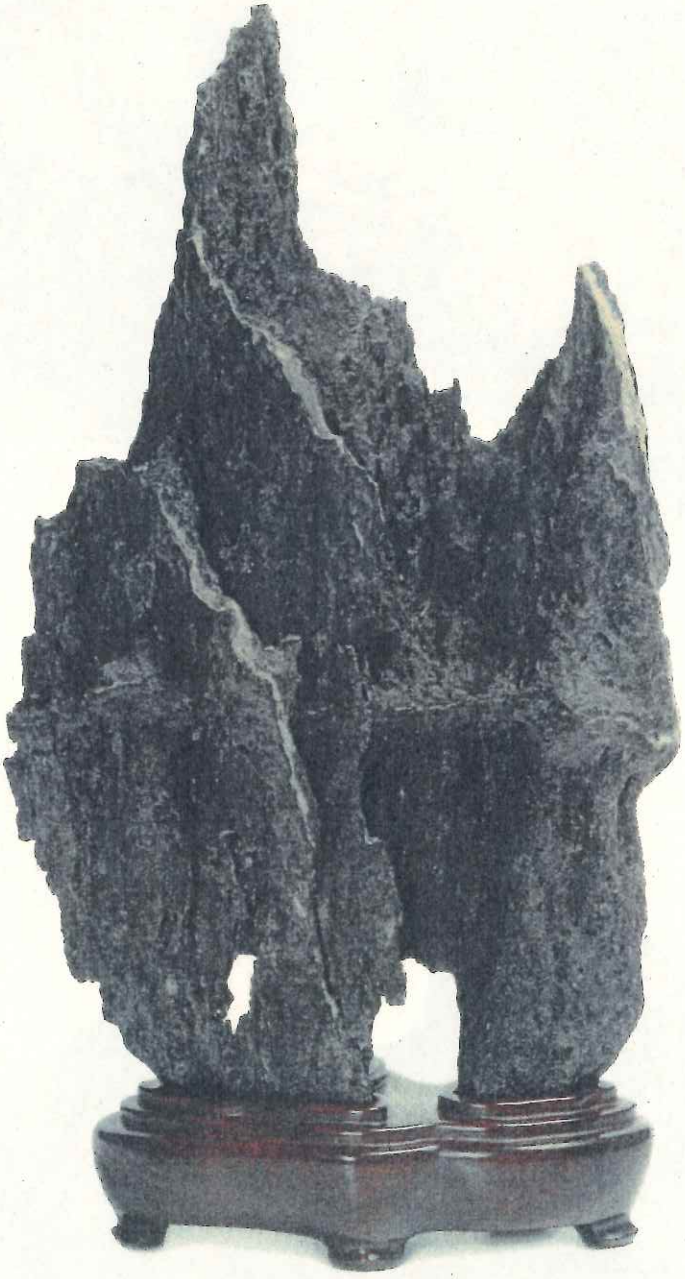
自分ライフが楽しくなる趣味の本 The Monthly Aiseki

愛石

7
July 2012
No.72/346

新名石探訪

佐治川十石



佐治川石　14×24×10　岸田哲夫氏蔵

連載 石の美と心

連載 愛石事典

連載 水石を楽しむ

連載 身近で楽しむ水石

鳥取県

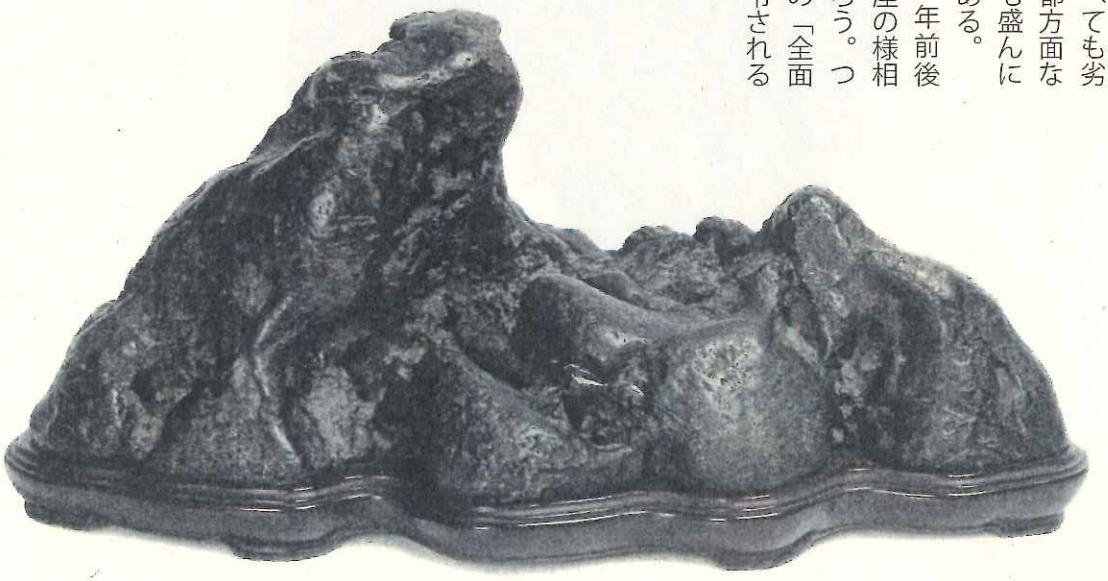
佐治川十石（さじがわじゅっせき）

新名石探訪 72

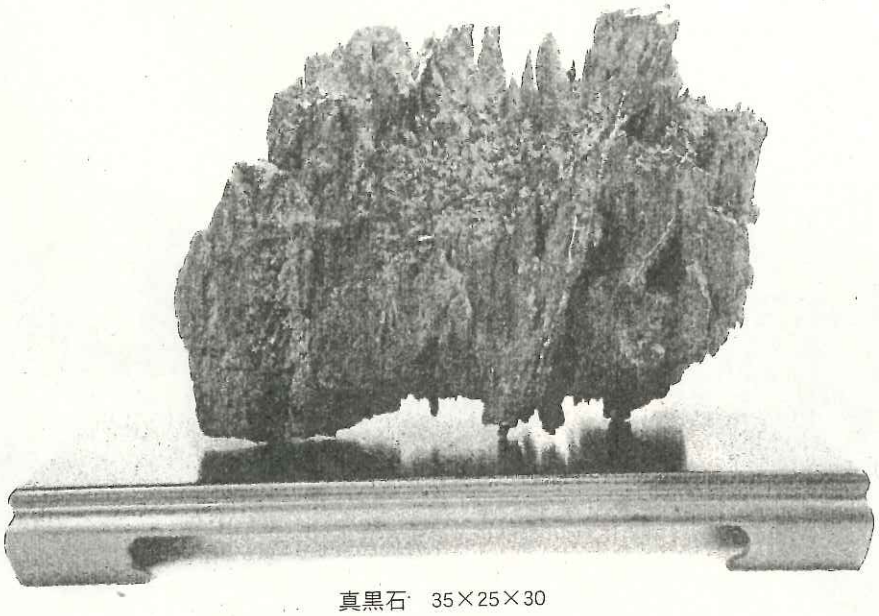
佐治川・加瀬木附近。条例により、本流での探石は禁止となっている。

佐治川石が広く世に出るようになったのは、大正から昭和初期にかけてであったと思われる。加茂川石に較べても劣らないと言われ、京都方面などから庭石業者なども盛んに採石に訪れたようである。

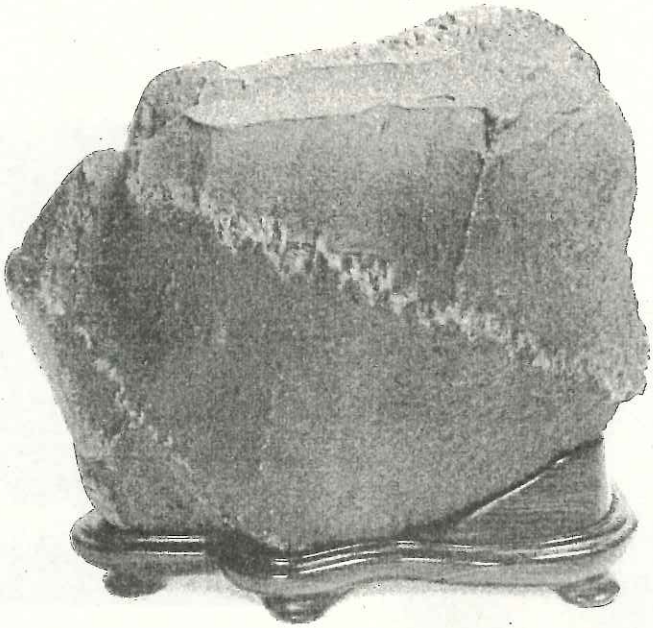
石ブームの昭和40年前後は、さながら探石銀座の様相を呈していたのであろう。ついに、佐治川本流での「全面採石禁止」条例が発令されるに至ったのである。



真黒石　33×15×16　岸田哲夫



真黒石　35×25×30



真黒石　31×23×25

佐治川十石

鳥取愛石会会長　岸田哲夫

10種類の佐治川石の特徴

①真黒石

黒、青黒、灰色など、凹凸に富み、針鋸状の肌をしている。濡れると青黒く輝く佐治川真黒石は特に貴重がられている。

②灰地石（はいじせき）

チリメン肌（鶯色をしている梨肌のこと）をしていて、色は灰黒、青、灰色で、石英質の盛り上がる線条が縦横に交差しているのも風情を添える。

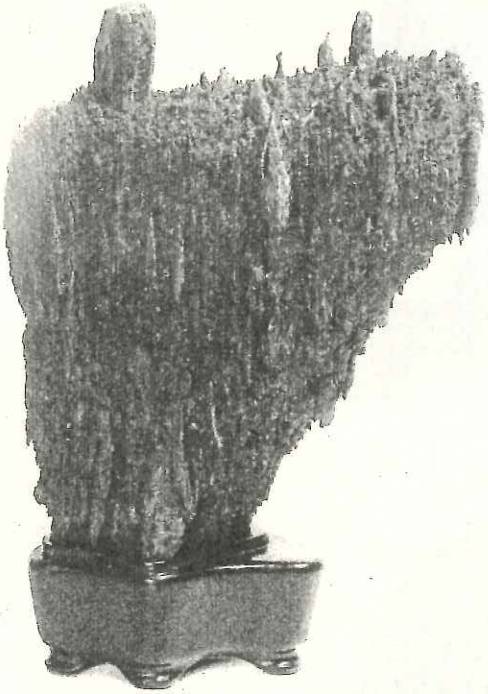
③雲懸石（くもかけいし）

青黒地、青色地の母岩に、雲のように石英質の白、黄色の流れた様々の姿や、青に乱れ雲の様子がとてもよい。ジャクレは少ない。

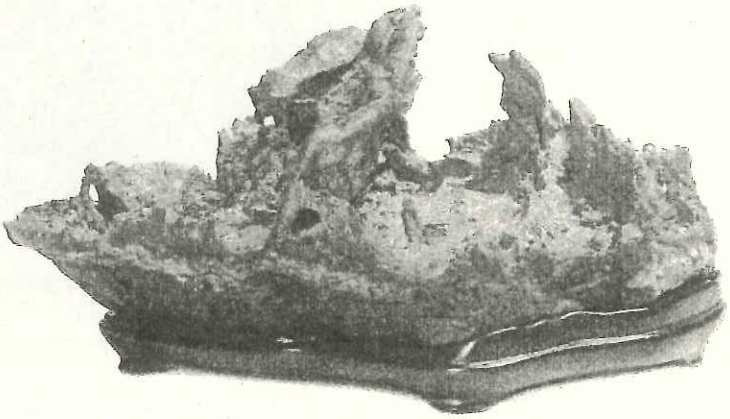
④糸掛石

かば色、茶褐色で、石英と泥岩質の不規則な互層を呈し、形は不定。産出量は少ない。

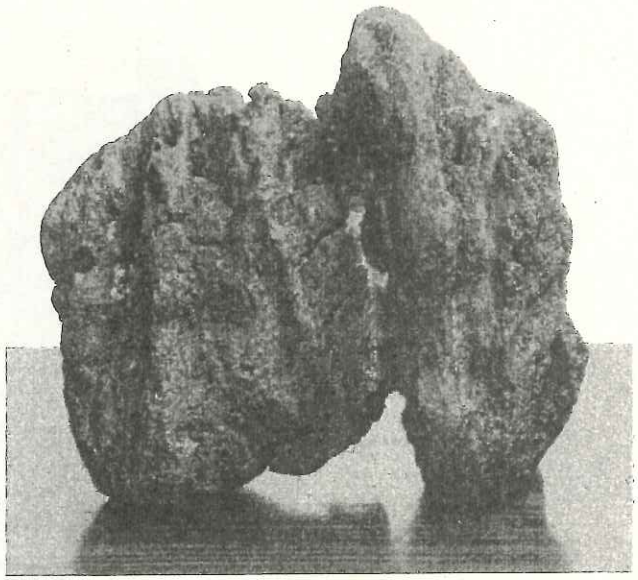
⑤碧譚石（へきたんせき）



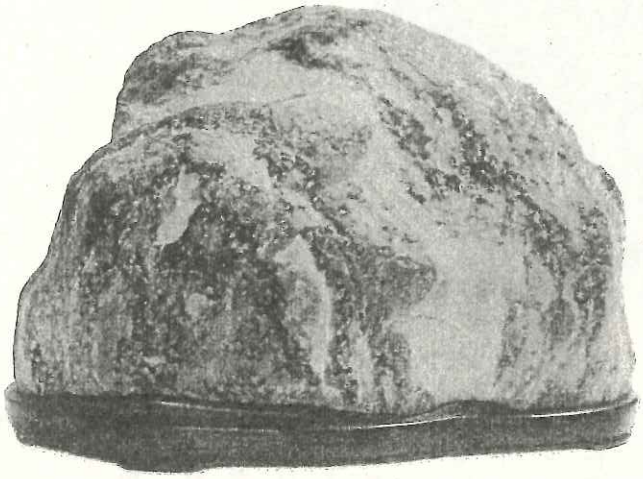
灰地石　15×21×7



灰地石　16×8×10



灰地石　17×15×12



灰地石　18×12×8

以前は青黒石と称した。ジャクレを持ち、凸部の滑らかな肌と、凹部の川擦れした地肌とのコントラストが絶妙である。

⑥虎石
泥岩と砂岩の織りなす様々な互層で、赤、茶、紫、黄色と多種ある。互層の間のくびれが少ないため、形の良いものに出会う機会が少ない。

⑦紋石
碧譚石、灰地石にも紋状の眺められるものがあり、その他の石にも各様の紋様のものがある。

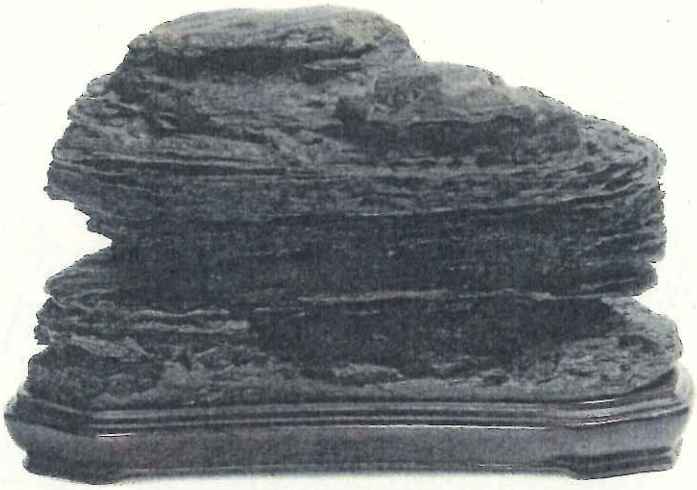
⑧霰石（あられいし）
梅のつぼみのような肌をしており、つぶの大きさによって、豆石とも米点石とも言う。
ゴマ状の粒が付着した石肌が魅力的である。

⑨巣立ち石
巣が立ったような肌の石で、質はあまり良くない。

⑩天平石（てんぺいせき）
天が平らで、あるいは天の端が巻きこんだ石。ジャクレが少ない。

あられ石（豆石） 10×9×7

虎石 10×19×9



あられ石（豆石） 19×14×16

佐治川石今昔物語

鳥取愛石会元会長　石井健夫

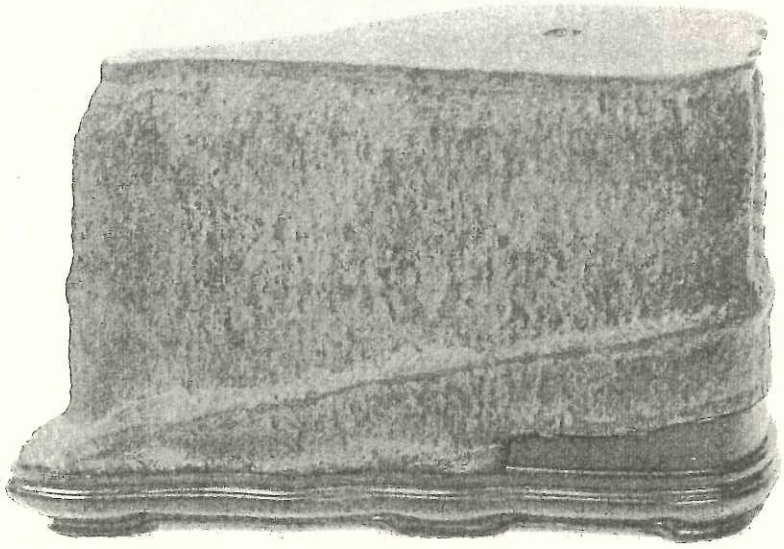
明治から昭和初年

昭和35年、佐治村で発刊された郷土文化シリーズ・第五輯「佐治村の石」の中で、大正初期、佐治川石の先覚者の一人でもある故・岡本正男翁が、京都方面に千貫位の大きいものを四ツ台馬車3頭ほどで搬出した、と述べている。搬出先は黒川連月庵と河合香草園のことと思われる。また翁は、爾来四十有余年の間、各方面に佐治川石を搬出され、その数は実におびただしいものであった、と推定している。（中略）

佐治川石の開拓者

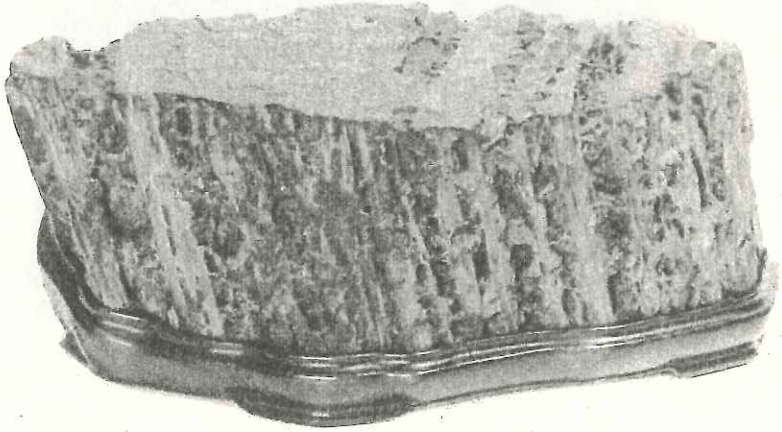
戦後間もなくて、いまだ世情騒然としていたころの昭和22年、再開された第1回国風展に出展のため、石谷拝石翁が名石「千貫松島」をリュックに背負って、混雑する列車を乗り継ぎしながら東京に運ばれた話はあまりにも有名であり、当時、関係者に大きな感動あたえた。

筆者も後年、石谷家と懇意な鳥取愛石会顧問・松島久夫氏の案内で石谷家を訪れ、「千貫松島」を拝見し



天平石　14×16×9

天平石　8×19×8



天平石　30×10×17

たが、洞門状のぬけのある島形石で、その貫禄に圧倒される思いであった。この石は水石としては大振りの石で二十数kgにも及ぶが、運搬に大変なご苦労をされたことを想い浮べ頭の下る思いであった。（中略）

佐治川七石について

昭和40年発行の、佐治村郷土文化シリーズ第六輯「佐治川石」によると、当時の佐治川同好会が、佐治川石を次の七種に分類され、それぞれ説明をなされているので、分類名だけを掲げて置く。

(1)佐治川本石（真黒石）　(2)佐治川灰地石　(3)佐治川雲懸石　(4)佐治川糸懸石　(5)佐治川碧潭石　(6)佐治川虎石　(7)佐治川紋石

以上、佐治川七石と呼ばれているのは、これに起源するものである。

どこの産地でも、産地毎に石の種類を分類し分類別に名称をつけているが、石の分類は極めて難かしく、例えば、一般的に真黒と呼ばれている石でも、硬質で全面漆黒の物から、茶色を喘んだ物、蒼昧を帯びた物等があり、また灰地の石でも、石肌の荒い物、良質でチリメン肌状の物、養石が進めば黒く変化する石もあるし、水石を生んだ母岩の場所や

へきたん石　12×9×6

へきたん石　12×13×11

へきたん石　18×11×15

年代層によっても、硬度や形状が微妙に変化しているので、分類はおおよその目安として考えるのが適当であると思う。

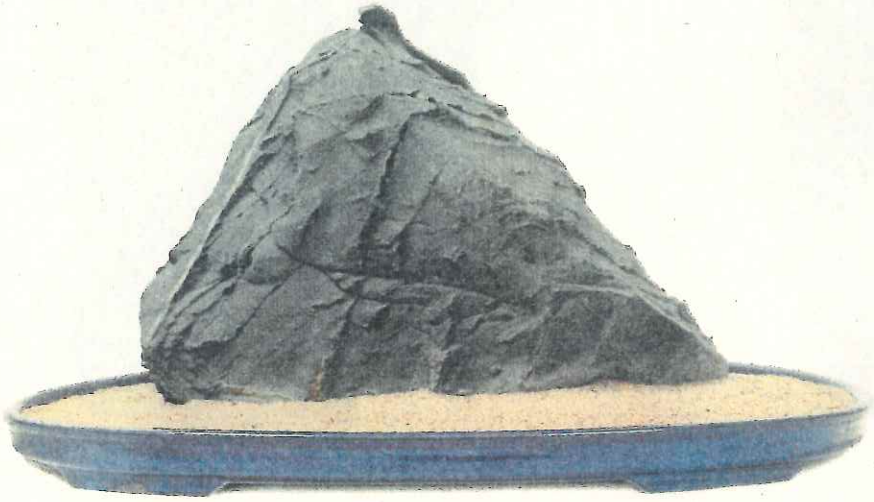
分類はともかくとして、美を見定めるのは美術品も石も全く同じで、良質の物・最高の名品と言われるような物を数多く見ている内に、自然に審美眼が養われるものであり、佐治川石とて例外ではない。

佐治川石の原石の学術的な名称であるが、鳥取大学の名誉教授で、かつて鳥取愛石会の会長や顧問も務められた故・原田光博士の説明によると、佐治川石は緑色千枚岩であるが、以前には輝緑凝灰岩と呼ばれていた、と記されている。（中略）

前記七石の内には、佐治川豆石、佐治川米点石、佐治川巣立石等は含まれておらず、最小限、この三種類は佐治川石の種類に含め、佐治川十石として呼称するのが望ましいとも考える。（中略）

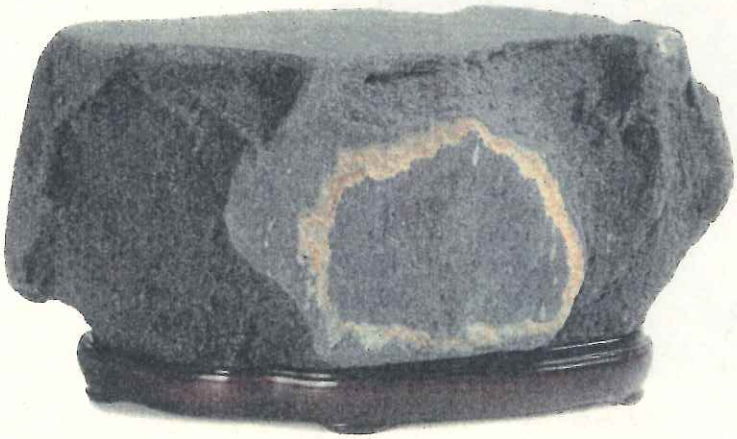
昭和二十年代から石ブーム時代

戦後の二十年代は、未だ極く一部の人達の愛石趣味であったが、戦後の混乱から復興のきざしが見えはじめ、食糧事情も次第に好転するにつれ、人心もようやく安定を取戻し、



ちりめん石　41×26×18

雲かけ石　8×19×4



紋石・天平石　27×15×12

自然や美を求めるゆとりが出来るようになった。（中略）

全国的な石ブームの中で、鳥取愛石会が発足したのが昭和38年で、爾来二十数年を経過しているが、佐治村にも39年3月に、佐治川水石同好会が産声を上げ、その年の10月、東京都内2カ所で展示会を行い、300点近い佐治川石を出展されている。（中略）

昭和39年に入るや、日曜・祭日をピークとして、県内はもとより、隣県の岡山、兵庫からも採石に訪れる人々は後を断たない有様であった。その間、庭園用の石も乱獲される機運も交って、種々の問題をはらみつつあったが、昭和40年9月、23号台風の激しい災害が佐治川にやって来たのを機会に、益々乱獲される状勢が進んで来たので、遂に10月10日過ぎより、県知事名を以って『全面採石禁止』が発令されるに至った。

一部心ない採石者のために、多数の善良な愛石家が悲惨な目にあうという、よく世間にある姿になってしまったのである。（後略）

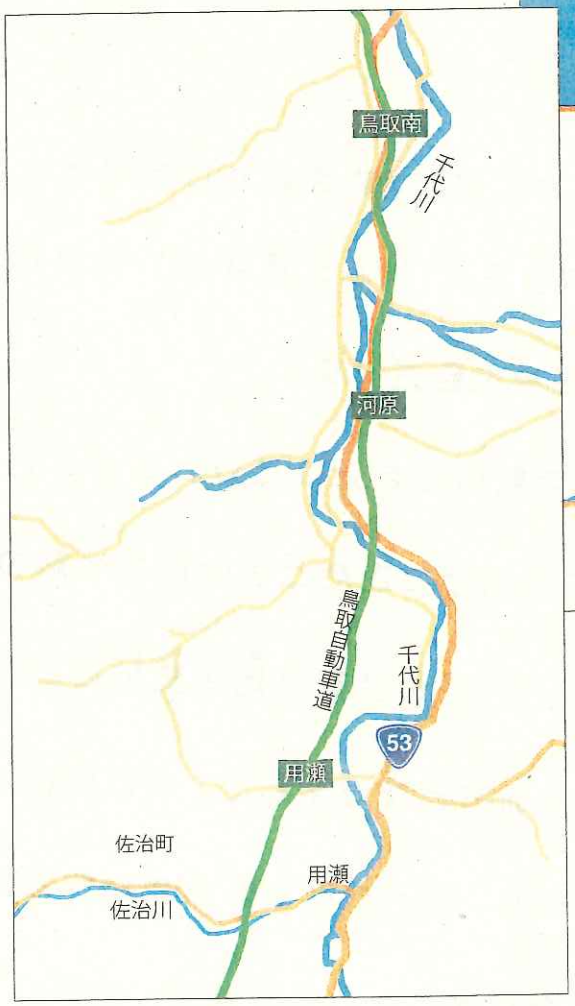
※本稿は、1986年（昭和61）7月号「月刊愛石の友」に掲載したものの再録です。再録にあたり、文字表記を一部改めました。

なお、新名石探訪シリーズでは、すでに佐治川石は取り上げましたが、今回は「佐治川十石」として別の視点からの掲載になります。

糸かけ石　19×22×9

巣立ち石　19×16×8　藤田好仁

佐治川石探石略図



佐治川石は、佐治川本流が県の条例により探石禁止となっているため探石はできないが、千代川（せんだいがわ）との合流地点である用瀬（もちがせ）から下流域全域に亘って探石できる。石は下流に行くほど細かくなり、川ずれが進んでいる。